2026 2/10
No.2252
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

江ノ島電鉄（藤沢市）は、20年ぶりの新型車両「700形」のお披露目式を極楽寺検車区（鎌倉市）で開いた。今春から営業運転を開始する予定。

神奈川新聞社

政経かながわ

2026 2/10 No.2252

contents

視点点描 3
模索する読者との双方向

特集 4
台湾有事は「信則無、不信則有」

経済双眼鏡 8
総選挙と財界
　意外に不人気の高市首相

よんななエコノミー 9
日本人国内旅行の再考
　―旅行市場とライブ市場の明暗―

くらし2026 10
重要性増すロコモ対策
　実は命に関わる大問題
　　若いころから気配りを

本郷和人 歴史の舞台をゆく 12
名水地の秦野

かながわTODAY 14
１月の主な経済ニュース

事務局だより

◇2026年２月特別講演会（TOPセミナー）
２月18日（水）午後３時30分～７時10分（６時から懇親会）
ホテルニューグランド
（横浜市中区）
※富士フイルムビジネスイノベーションジャパン共催。※お申し込みは終了しました。

◇2026年３月定例会（横浜市立大学共創イノベーションセンター長講演とオープンイノベーションラボ見学）
３月11日（水）
午後３時～４時30分
横浜市立大学福浦キャンパス
（横浜市金沢区）
講師：共創イノベーションセンター長　留目　真伸氏

【お知らせ】会報「政経かながわ」に会員企業の新商品の紹介、地域貢献活動、人事などジャンルを問わずさまざまな会員情報を掲載しています。掲載の問い合わせなどは事務局☎045（226）2121。

視点点描

模索する読者との双方向

「ひろば」「こだま」「ちまた」「地鳴り」「窓」…。神奈川では「自由の声」。これは、地方紙の新聞紙面に掲載されている読者投稿（投書）欄の名称です。

全国紙でいえば、「声」「気流」「みんなの広場」「談話室」といったところでしょうか。

新聞投稿欄のはじまりは明治期とされ、市民の多様な声を社会へ届ける手段として重要な役割を担ってきました。

地域に特化した地方紙の同欄は、身近なニュースや季節の出来事、地元のイベントなど生活に根差した内容が多い分、共感も大きく、地域の課題をさまざまな角度から意見交換する発端となることが多いといえます。記者が書く新聞記事では拾えない本音や声が可視化されることもあり、「言論の自由」の一端を担って、民主主義を支える議論の場になってきたといえましょう。しかし、ＳＮＳの普及などで情報環境が大きく変化した今、新聞投稿欄もそれぞれに形を模索しているのが現状です。

神奈川新聞の「自由の声」は、戦後間もない１９４５年11月、ペラ一枚だった本紙の一角に誕生。戦後80年の歩みとともに昨年11月で80歳を迎えました。この節目に合わせて本紙ウェブサイト「カナロコ」に特設ページを開設し、より多くの読者のみなさんとの双方向を探っています。

サイトには、担当記者がさまざまなバックボーンを持つ投稿者に新聞との接点を聞くインタビュー企画「投稿者を訪ねて」のコーナーや、投稿初心者のためのガイド、本紙投稿欄の歩みなどが掲載されています。

誰もが自分の意見や考えを瞬時に発信できるＳＮＳ時代に入り、新聞離れが加速化しているのは現実です。とはいえ、「自由の声」には、年齢、職業、性別、国籍に関係なく、多様な人からの投稿が日々寄せられ、掲載をきっかけに投稿者同士の交流が始まったりすることもあります。高齢層の投稿が多い傾向にありますが、最近はＺ世代など若い層が見知らぬ他者の思考に触れる場として、その魅力を再発見する動きもあります。

デジタル時代にあって「紙面に載る」という体験に価値を見いだす投稿者も少なくありません。「紙に書く」ことの意味はむしろ大きくなっていると、私たちは信じています。

※神奈川新聞「自由の声」は月～金曜の読者のページに掲載。

（神奈川新聞社統合編集局
編集総務部長・高田　久美子）